

# 師範試験実施要項

## ▽第六十六次漢字部課題

○漢字部 次の作品三点〔何れも半切35 cm×135 cmに揮毫〕を提出する

・規定《書体 楷書》

梅花雪猶寒 (塩屋古麻呂)

〈2023年1月号〉

読 梅花 雪猶お寒し

註 梅の花にかかる雪もやはりまだ寒いが、早春の景も風情のあるものだ。

・臨書 賀蘭汗造像記 十三字

大將軍廣川王賀蘭汗。造弥勒像

読 大將軍・廣川王の賀蘭汗の爲に、弥勒像を造る

・随意《書体 行草書》

天連嵩嶽寒雲盡 馬度黄河春草生 (謝榛)

〈2023年12月号〉

読 天は嵩岳に連なつて寒雲尽き 馬は黄河を度つて春草生ず

註 遠い嵩山の方を眺めると冬の雲はなく、黄河を渡り終えると辺りは春の草で満ちている。●嵩岳 山名。河南省登封県の北にある嵩山。

五岳の一つ。●黄河 揚子江(長江)に次ぐ中国第二の大河。渤海に注ぐ。※度は渡に同じ。

## ▽第六十六次かな部課題

○かな部 次の作品三点〔半切35 cm×135 cmに揮毫〕を提出する

・規定《書体自由》

村雨の露もまだひぬまきの葉に霧立ちのぼる秋の夕暮 (寂蓮)

〈2023年6月号〉

註 村雨が通り過ぎて、その雨の露もまだ乾かない、まきの木の葉に、霧が湧き、立ちのぼる秋の夕暮れであるよ。

・臨書 関戸本古今集(伝 藤原行成)

せみのこゑきけばかなしなくつころもうすくや人のならむとおもへば

・随意《書体 自由》

山茶花の蒼こぼるる寒さかな (芥川龍之介)

〈2023年11月号詩文書課題〉

註 山茶花の花が散り敷いた中に、その蒼までが落ちていく。その景に入

寒さが感じられる、意、開かずには落ちた蒼に寒さがとらえられた句。

## ▼第二十四次詩文書部課題

次の作品三点〔何れも半切35 cm×135 cmに揮毫〕を提出する ※形式は縦作品に限る

・規定《原文を尊重すること》

来て見れば雪消の川べしろがねの柳ふふめり露の臺もさけり (斎藤茂吉)

〈2023年1月号〉

註 川辺に来てみると、雪どけの中に早くも柳が白銀の色の芽をふくらませ、足もとには露の臺が細かい花を開いていることだ。

・臨書 (いろは歌) いろは歌を半切に揮毫、得意な古法帖(限定はしない)にて。全部ひらがなでもよい。

いろ(色)はにほ(匂)へどち(散)りぬるを

わ(我)がよ(世)たれ(誰)ぞつね(常)ならむ

うゑ(有為)のおくやま(奥山)けふ(今日)こ(越)えて

あさ(浅)きゆめ(夢)み(見)じゑひ(酔)もせず

・随意《原文を尊重すること》

夕顔を蛾の飛びめぐる薄暮かな (杉田久女) 〈2023年7月号〉

註 夕顔のおぼろげに白い花の周囲を蛾が飛び回っているというのである。幻想的な絵の如き句。

― 受験についての注意 ―

一、受験資格 漢字・かな・詩文書とも準師範。但し、『日本書道院展(二回以上)出品経験者』で、満二十才以上であること(二〇〇五年四月一日生まれまで認める)。

一、受験料 一万二千元(漢字・かな・詩文書の別) 受験料は作品と別封とし、郵便振替にて同時に本院宛に送付のこと。

一、本院主催の日本書道院展に二回以上出品の者(部門不問)。第七三回展出品も可。

一、受験者は師範受験申請書を作品と共に提出のこと。

一、申請書は、返信料として84円切手を添えて本部へ請求のこと。

一、漢字部・かな部・詩文書部合格者は認定料として七万円納入のこと。その証として認定証を授与する。認定証の姓号は申請書の姓号によって作成する。

一、切 十月二十一日 発表十二月号

一、作品には申請書に添付の出品票を使用して準師範になった年月(日本書道誌発表の月)を記入して貼付すること。又、作品の左下隅にも同じく鉛筆で段位・支部名・氏名を記入のこと。

一、不合格者(規定違反も同じ)はその氏名を発表しない。

一、師範試験作品は白画仙紙を用い、封書に必ず「師範応募」と朱書のこと。

○なお、(1) 試験の結果をお知らせするため、返信用封筒(切手貼付、宛名、住所明記のもの)を同封のこと。

(2) 提出した作品は一切返却しない。

○月刊「日本書道」十月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

○出品作品には雅印押印のこと。

▼第九次硬筆部課題 次の課題を「硬筆用紙」に書いたものを三点提出する

・規定《楷書》

桜筍有厨憐舊雨 鶯花無夢到長安 (陸嵩齡) <2023年6月号>

註|| 桜筍 厨有つて旧雨を憐れみ 鶯花夢無くして長安に到る

註|| 台所でゆすらうめの実と竹の子を料理していると昔なじみを思い出し、春景色を味わう間もなく長安へ来た。●桜筍|| ゆすらうめと竹の子。●旧雨|| 古い友。●鶯花|| うぐいすと花。春景色をいう。

●長安|| 今の陝西省西安市。

・随意《原文を尊重すること 書体自由》  
鍛錬を重ね限界に挑む選手達は観戦者を励まし憧れを抱かせる。

<2023年4月号>

・臨書 高野切第三種 (伝 紀貫之)

ひとふるすさとをいとひてこしかども ならのみやこもうきなくりけり

<2023年1月号>

― 受験についての注意 ―

一、受験資格 準師範

一、受験料 八千円 受験料は作品と別封とし、郵便振替にて同時に本院宛に送付のこと。

一、受験者は師範受験申請書を作品と共に提出のこと。

一、申請書は、返信料として84円切手を添えて本部へ請求のこと。

一、合格者には認定証を交付する。但し認定料として五万円納入のこと。認定証の番号は申請書の番号によって作成する。

一、切 十月二十一日 発表十二月号

一、作品には申請書に添付の出品票を使用して準師範になった年月 (日本書道誌発表の月) を記入して貼付すること。

一、不合格者 (規定違反も同じ) はその氏名を發表しない。

一、師範試験作品は硬筆用紙を用い、封書に必ず「師範応募」と朱書のこと。

◎なお、(1) 試験の結果をお知らせするため、返信用封筒 (切手貼付、宛名、住所明記のもの) を同封のこと。

(2) 提出した作品は一切返却しない。

◎月刊「日本書道」十月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

準師範試験実施要項

▼第七十六次漢字部・かな部課題

○漢字部 次の作品二点 (何れも半切35cm×135cmに揮毫) を提出する

・規定《書体 行草書》

桃花潭水深千尺 不及汪倫送我情 (唐) 李白 <2023年3月号>

註|| 桃花潭水 深さ千尺 及ばず 汪倫 我を送る情に

註|| この桃花潭の水の深さは千尺もあるというが、その深さも、汪倫が私を見送ってくれる友情の深さには、とても及ばない。

・臨書 集王聖教序 (王羲之) 十六字

雲露方得泫其花蓮出渌波飛塵不能汗

註|| 雲露方に其の花を泫すを得、蓮の渌 (漉) 波より出でたるには飛塵も (其の葉を) 汗すこと能わざるがごとし。

○かな部 次の作品二点 (半切35cm×135cmに揮毫) を提出する

・規定《書体自由》

歎けとて月やはものを思はるかこちがほなるわが涙かな <2023年5月号>

註|| 歎けとて、月は物思いをさせるのであろうか、そうではない。

けれども、月のせいだと、かこつける様子で、こぼれ落ちているわが涙であるよ。

・臨書 高野切第三種 (伝 紀貫之)

うめのはなさきてのゝちのみなればや すきものとのみひとのいふらん <2023年11月号>

▼第四十六次詩文書部課題

次の作品二点 (何れも半切35cm×135cmに揮毫) を提出する ※形式は縦作品に限る

・規定《原文を尊重すること》

卯の花や水の明りになく蛙 (小林一茶) <2023年5月号>

註|| 卯の花が白く咲いて蛙。夕闇が迫る川辺の水明りに蛙が鳴いている、の意。印象鮮明な美しい景である。

・臨書 (楊大眼造像記) 五字

仇池楊大眼

読|| きょうちのようたいがん

― 受験についての注意 ―

一、受験資格 漢字・かな・詩文書とも六段。但し『日本書道院展出品経験者』で満十八才以上であること(二〇〇七年四月一日生まれまで認める)。

一、受験料 八千円(漢字・かな・詩文書の別) 受験料は作品と別封とし、郵便振替にて本院宛に送付のこと。

一、本院主催の日本書道院展に一回以上出品の者(部門不問)。第七三回展出品も可。毎日書道展出品も考慮する。

一、切 十月二十一日 発表十二月号

一、作品には申請書に貼付の出品票を使用して六段になった年月(日本書道誌発表の月)を必ず記入して添付すること。又、作品の左下隅にも同じく鉛筆で段位・支部名・氏名を記入のこと。

一、不合格者(規定違反も同じ)はその氏名を発表しない。

一、受験作品は白画仙紙を用い、準師範受験申請書を作品と共に提出のこと。また、封書には必ず「準師範応募」と朱書のこと。

一、準師範受験申請書は、返信料84円切手を添えて本部へ請求のこと。

一、提出した作品は一切返却しない。

◎月刊「日本書道」十月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

◎出品作品には雅印押印のこと。

◎師範受験時には日本書道院展出品が二回以上必要となる。受験の際は注意すること。

### ▼第十八次硬筆部課題

次の課題を(硬筆用紙)に書いたものを二点提出する

・規定《書体自由》

人生とは絶望の中にほのかな夢が芽ぶき歓楽の中にも愁いが漂うものです。

〈2023年11月号〉

・臨書 蘭亭序(王羲之) 十六字

文嗟悼。不能喻之於懷。固知一死生為虛

読||文に(臨んで)嗟悼せずんばあらず。之を懷に喻る能わず。固より死生を一にするは虚

註||その文を(前にして)嘆き悼まずにはいられない。それを心にさとすことができる。もとより死と生を同一にするのは偽りであり、

一、受験料 五千円

一、準師範受験申請書は、返信料84円切手を添えて本部へ請求のこと。

一、切 十月二十一日 発表十二月号

一、作品には申請書に貼付の出品票を使用して六段になった年月(日本書道誌発表の月)を必ず記入して添付すること。また、封書には必ず「準師範応募」と朱書のこと。

◎月刊「日本書道」十月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

### 昇段・級試験実施要項

#### ▼第一三五次漢字部・かな部課題

第一部「半切35cm×135cm」次の漢字又は、かな(各書体自由)を半切の場合、縦に揮毫したものの一点

○漢字部

白酒新熟山中歸 黃鸝啄黍秋正肥 (唐・李白) 〈2023年9月号〉

註||白酒新熟に熟して 山中に歸る 黃鸝黍を啄んで 秋正に肥えたり

註||どぶろくが新しく出来上がった頃、山中の我が家へ帰って来た。庭では黄鸝(茶色のにわとり)がきびをついばんでまるまると肥えており、秋もまさにたけなわである。

○かな部

きりぎりす鳴くや霜夜のさ庭に衣片敷きひとりかも寝む (藤原良経)

〈2023年10月号〉

註||蟋蟀の鳴く、霜の下りる夜の寒い寝筵の上に、私は衣を片敷いて、ひとり寝をするのであろうか。

一、受験資格 漢字・かなとも二級以上のもの。

一、受験料 一点につき 四千円。

一、成績により六段以下の相当級に編入する。

漢字・かな受験者の事情により昇段試験の課題(漢字・かな)を半切1/2(35cm×68cm)に二点(書体《書風》を変えるか縦・横にする)揮毫しても受験することができる。ただし、現在二級・一級・初段・二段の人は一点でもよい。

第二部「半紙」次の漢字(楷書)又は、かな(書体自由)を半紙に揮毫したものの一点

○漢字部

好古敏求(論語) 〈2023年11月号〉

註||いにしえを好み、敏に(さとく)求む。古学を好み修養にはげむ。

○かな部

世の中は常にもがもな渚ごく海士の小舟の綱手かなしも(源実朝) 〈2023年12月号〉

註||この世はいつも変わらないであってほしいものだ。海辺を漕ぐ漁師の小舟を綱で引いていく情景が深く心をひくことよ。

一、受験資格

漢字・かなとも二級以下のもの(漢字作品には支部名・級・氏名(号)を競書と同じく筆によつて揮毫する。かなの場合は名(号)又は雅印を捺したうえに、左下隅に鉛筆で級と支部名、姓号を記入する。)

- 一、受験料 一点につき 千五百円。
- 一、成績により一級以下の相当級に編入する。

#### ▼第四十六次詩文書部課題

○第一部 「半切」次の俳句〔原文を尊重すること〕半切35cm×135cmに揮毫したものの一点

※形式は半切の場合は縦作品に限る

○鐘ひとつ売れぬ日はなし江戸の春（榎本其角） 〈2023年2月号〉

註Ⅱ江戸は流石に繁華な地である。売れにくい寺の梵鐘さえ売れない日はない、の意。大江戸の春の繁昌ぶりを謳歌した句。

- 一、受験資格 二級以上のもの。
- 一、受験料 一点につき 四千円。
- 一、成績により六段以下の相当級に編入する。

詩文書受験者の事情により昇段試験の課題を半切12（35cm×68cm）に二点（書体《書風》を変えるか縦・横にする）揮毫しても受験することができる。ただし現在二級・一級・初段・二段の人は一点でもよい。

○第二部 「半紙」次の俳句（原文を尊重すること）を半紙に揮毫したものの一点

※形式は縦作品に限る

○青嵐鷺のゆくへを遠眺め（星野麦人） 〈2023年6月号〉

註Ⅱ一面の青田の上を強い風が渡って行く。遠くに白鷺が飛んで行くのが見られる。静かな田園の趣であり、色彩感豊かな句。

- 一、受験資格 二級以下のもの。
- 一、受験料 一点につき 千五百円。
- 一、成績により一級以下の相当級に編入する。

#### 新 書例集刊行

日本書道院役員、審査委員の作品

日本書道院展公募一科、並びに同人。

毎日書道展公募サイズ、一尺×六尺、二・四尺×五尺のサイズ

漢字・かな・詩文書二〇八点掲載

一、A4判 上製本

一、会員配布 五〇〇〇円 送料込

#### ▼第二十次硬筆部・昇段・級試験課題

○応用部 次の課題を「硬筆用紙」に書いたもの一点

今日は人の身 明日はわが身だから 今日一日を精一杯生きよう

〈2023年1月号〉

一、受験資格 一級以上のもの。

一、受験料 一点につき 三千円。

一、成績により六段以下の相当級に編入する。

○基礎部 次の課題を「硬筆用紙」に書いたもの一点。

雪をかぶった嶺が天高くそびえ神宿る山とも言われる富士の山。

〈2023年2月号〉

一、受験資格 二級以下のもの 作品には支部名・級・氏名（号）を競書と同じく硬筆用紙に書く。

一、受験料 一点につき 千五百円。

一、成績により一級以下の相当級に編入する。

― 出品についての注意 ―

一、×切 十月二十一日 発表十二月号

一、作品には十月号発表の競書成績の段級と支部名又は府県名、氏名又は号を書いた小票（たて11センチ×よこ4センチ・競書用出品券使用可）を作品の左下に貼付する。又作品左下隅にも同じく鉛筆で段級・支部名・氏名を記入する。硬筆部は『硬筆用紙』に記入する「級の無いものは新とすること」。

一、漢字部・かな部・詩文書部の一級以上の者は第一部「半切」へ、『硬筆部は応用部・硬筆用紙で』出品のこと。

一、各部で昇級できなかった者は氏名を発表しない（規定違反も同じ）。

一、昇級試験の作品は競書作品と別にし、必ず封書に「昇試」と朱書のこと。

一、受験料は郵便振替にて作品と同時に送付のこと。

一、提出した作品は一切返却しない。

◎月刊「日本書道」十月号に添付の『出品一覧表』に記入の上出品のこと。

◎「半切・半紙」出品作品には雅印押印の習慣をつけること。